「アート」の概念を問いなおす

――現在の流行現象を中心として――

石田　香里

今回のシンポジウムのテーマ「アートを哲学する」に従って、アート内部の状況にも少し触れながら、アートを取り巻く社会的状況を中心に、その状況を把握する方法を提案し実際に試みることで、問題提起を行うことにする。

一　「アート」の意味を歴史的にたどる

「アート」(英art)の語源はラテン語のarsである。arsは古代ギリシャ語のtechne（ラテン文字表記）(1)の翻訳である。techneの意味は「技術」、殊に「生産技術」である。「技術」を表現する語の中でもtechneは即物的な概念であって、たとえばアリストテレスの『ニコマコス倫理学』(2)には「技術」を意味する五種類の語の位置づけが書かれている。それらは位置づけの高い順に、nous「理性」、sophia「哲学的営み」、episteme「科学(＝学問)的知識」、pronesis「思慮」、techne「技術」となっていて、techneは最も低い位置づけがされている。techneは人間の活動の中でも高度な精神性を必要としない、最も精神性の度合いの低いものと捉えられている。

古代ギリシャ時代にはこのような意味のtechneであったが、中世においてもartは「目的を達成するための手段・方法」という「術」という意味合いが強かった。たとえば「弁論術」(ars oratoriae)や「記憶術」(ars memoriae)などの用法である。

実際古代ギリシャの「アート」を見てみると、造形芸

術作品のほとんどは私たちには作者名が知られていない。それに対して戯曲は劇作家名が知られて今日まで伝えられている。今日ではこれらいずれの作品も芸術として捉えられているが、こうした事実から造形芸術作品は精神性が最も低いtechneの範疇で、戯曲とは別のものと考えられていたと見るのが妥当である。このように、「アート」は精神性の低い「技術」の概念であった。

中世においてもこうした傾向は変わらない。

この事態に変化が出始めるのはルネッサンスで、たとえば絵画や彫刻といった造形芸術作品に、ダ・ビンチやミケランジェロといった作者名が対応して登場する。正確に言えば、この時代の作品は多くの 場合がダ・ビンチやミケランジェロといった作者が一人で創ったのではなく、彼らの率いる工房の作品 であるが、作者名が明記されたことは、それまでの時代と一線を画す出来事であった。それは次の時代への移行期の現象と解釈することができる。

やがて近代になって、たとえば絵画が建築に組み込まれた壁画から抜け出して、持ち運び可能なタブ ローとなって独立するといった事実と並行して、「芸術」「作品」「芸術家」という概念が確立する。さらに、芸術を対象に学的反省を加える「美学」というジャンルも確立する。

このように、「アート」の概念は西洋近代という特徴(制約)を負うものであり、「アート」の哲学である美学もまた西洋近代という特徴(制約)を負っている。

さらに「アート」という概念は、その語源である「技術」すなわち「人間が自然に働きかけて何かを生産する」という意味から、自然と対立する(=人工)概念でもある。

しかし、当初は自然の対立概念として始まった「アート」も、「技術」という意味よりも「芸術」という意味が強まるにつれて、一回限りのもの、すなわち大量生産や再生産のできないかけがえのないものという意味合いが強くなってくる。すると、人工物ではあっても、工業生産品とは区別された手作りのものの意味が生じて、単純に自然の対立概念とは言い難くなってくる。やがて今日の日本社会のように、「手作り」が素朴で自然なイメージと結びつき、その対立項は人工的なイメージと結びつい

た画一的な工業製品という、錯綜とした状況を生み出すにまで至っている。

二　西洋近代の「アート」の枠を破る試み
――アート最前線事情

現代アートは、西洋近代の「アート」の枠を打ち破って新たな活路を開こうとした試みと捉えることができる。すなわち現代芸術の大きな特徴の一つに、伝統的な形式に対する破壊性がある。

たとえば音楽の分野では、旋律やリズムといった音楽の成立にとって不可欠の要素を破壊する試みが見られる。造形芸術の分野では、この現象が形あるいは様式の破壊になって表れている。ダンスにおいても古典バレエに対する形の破壊の試みが見られる(3)。

こうした従来の型や様式の破壊の段階を超えて、造形芸術の新たなあり方を模索する試みが現在活発になっている。また、「アート」の概念は語源からいって自然と対立するものであったが、自然との対立に逆行するようなものも現在増加している。そうした例をここで幾つか見てみよう。

まず始めに、小沢剛(おざわたけし)氏の「相談アート」である。これは来客と相談しながら作品を創って行くもので、作品の構想はアーチストの独占であった従来の作品概念からすると、これは誰の作品ということがきるだろうか。

また、ウィリアム・レイサム氏のコンピューターアートの作品は、画面の中にあたかも生き物がいるような動きをして、人体や動物の体内の器官の動きや増殖を思わせる。「アート」はartificial(英「人工的な」)の語源として自然に対立する概念であったのが、ここでは結果として自然を模しているように見える。

さらに、岩波洋造氏が提唱している「バイオアート」は生物の電子顕微鏡写真に着色したものであるが、これは着色によって強調された自然の造形美を鑑賞するものと言うことができよう。ここまで来るともはや「アート」は自然に対立する概念ではなくて、自然そのものを鑑賞することが「アート」の意図になっている。

三　西洋近代「アート」以外のアート

しかし目を転じてみれば、西洋近代の「アート」の枠外に、古くから「アート」というべき作品が数多く存在していた。

三・一　祈りの芸術

その典型的なものは、祈りの芸術である。神像・神画・神殿建築や仏像・仏画・仏教建築といったものは本来は祈りを目的に創造されたものであるが、芸術作品として社会的な認知を得ているものも少なくないし、その作者もアーチストとして扱われていることも多い。さらに、祈りの過程に制作され儀式が済むと壊されるチベット密教の砂曼陀羅や、神を迎えるために毎朝主婦が家の前に描くインドの砂絵などは、作者の意図とは別に、コミュニティ外部の者からは「アート」に見えるものもある。

三・二　工芸品

また、工芸品にも実用を目的に創られていながらも「アート」ということができるものが多く存在する。「美術工芸品」という言い方もあるくらいだ。たとえば「日本伝統工芸展」に出品するような作者は、実用性は最低限の条件として備えておいた上で、さらに美術品をめざして制作していると考えられる。

日本の工芸品で体系立って生活全体のデザインを意図した最初は琳派であるが、彼らの試みも「アート」と言えよう。

三・三　化粧・身体変工

さらに、化粧や身体変工を見ると、日常性と「アート」の境界事例が数多くある。

ニジェールのヌバ族など部族特有のボディペインティングやヘアスタイル、そして瘢痕・入れ墨・ピアスなどの身体変工は、コミュニティの規則以上の豊かな創造性を伴っていて、「アート」の域に達しているものも見られる。

また現在の日本社会でも、若者を中心とするヘア・メーキャップなどの身体に対する加工に、日常と「アート」との境界的な事例が街中で多く見かけられるようになった。

たとえば髪の色の変化（カラーリングあるいは脱色）やヘアスタイルには、かつてない多様なものが見受けられる。爪もただカットして色をつけるだけでなく、絵を描いたりライトストーンと呼ばれる装飾物を付けたりするようになった。しかもそれは「ネールアート」と呼ばれる。今年になって、タトゥーという名称でファッションとしての入れ墨を実際に行う者も見られるようになったが、多くはシール状になったものが使用されている（タトゥーシールという）。ピアスは耳朶にするのは当たり前の状況になり、身体の他の部分にまで急速な勢いで広まりつつある。

こうした例を見てみると、現在の流行に新たな「アート」の概念を探る鍵があるような印象を受ける。次章以降では実際に、現在の日本社会の流行現象から「アート」とは何かを探ってみよう。

四　流行からみた「アート」の変容

四・一　流行現象①顔写真の氾濫

「プリント倶楽部」という顔写真のシールが、高校生の流行から始まっていまやすべての年代に広まりつつある。この特徴は、一般の人が自分たちの顔写真シールを簡単に作って仲間うちで流通させる点だ。

また、同じく女子高校生を中心にスナップ写真を撮ることも流行現象として見られる。かつて写真は特別な日の記念のために撮影するハレのものだったが、今日の流行をみているとその片鱗すらない。これは親が子の成長を記録するのとも違って、生きている今を切り取って自分自身であるいは仲間うちで確認し合う要素が強いので、コンパクトカメラ（使い捨てのものも多い）を持ち歩いて、文字通り「いつでもどこでも」撮影する。

まとめると、一般の人の顔写真が氾濫する時代ということができる。

四・二　流行現象②変身願望と変身事業

だれにでもあると考えられる変身願望を、従来のように隠し立てせず臆面もなく表に出して、しかも当人が楽しんでいる、そのような風潮が最近になって見られる。そして、そうした人々の受け皿としての変身事業と

も言うべきビジネスが、産業として成立するようになってきたのもまた、最近のことである(4)。

また、サングラス・カツラ・付け爪・付け睫毛・タトゥーシールなどを活用して、日常のなかでも小さな変身を楽しんでいる。

その場合の意識は、たとえばカツラは、本人が気にしている頭髪に関する点を隠すために使用するのではなく、カツラをつけていることをとくに隠す意識はない。鮮やかな黄緑やオレンジ・ピンクなどの色を部分的に取り入れてみたり、本人のものとは違ったヘアスタイルでイメージの変化を図るなど、楽しむ意識で使用している。付け睫は、かつて(一九六〇年代)のようにコーカソイドの顔に近づくために使用するのではなく、つけること自体やさまざまな色を使用することによって表情の違いを楽しむ意識になっている。

四・三　流行現象③ダンスブーム

近頃ダンスの話題が目につくようになった。

たとえば、最近の話題映画に、ダンスや舞踊をモチーフにしたものが見られる(5)。ダンスやダンサーが登場する広告も増加してきた。さらにアイドルタレントを見ても、かつてのように「かわいさ」だけを売り物にしているのではなく、プロポーションまでも含めてファッションの手本であると同時に、それにとどまらず、ダンスの巧さも重要なセールスポイントになっている。

「アート」の分野でも造形芸術の停滞感・閉塞感に比較して、ダンス分野での活気が目立つ(6)。

そして、現在のダンスブームの最大の特徴は、女性を中心とするアマチュアのあいだで社交ダンスが盛んになったり、OLや主婦のあいだでのバレエやフラメンコ・インド舞踊などを習う人が急増していることなど、従来の子供のお稽古事やプロになる目的とは別の、大人が自分で楽しむためにダンスを習う現象が見られる点だ(7)。

四・四　流行現象④体験ブーム

たとえばパック旅行に体験を目玉にしたものが目につくようになった(8)ように、旅行・観光・学習の場を中心に体験を企画すると人気を博し、また体験を求めている人が増加している。

四・五　流行現象⑤「育てもの」

「たまごっち」という名称の電子ペットを育てるゲームが今年になってから爆発的な人気を博している。それに似た電子ペットを育てるゲームが雨後の筍のごとく登場している。

そうしたバーチャルな生物だけでなく、生活にペットを取り入れる人は従来以上に増加し、ガーデニングブームなど植物を育てる人も増えている。

また、室内に置くことで水晶に見えるものが育つキットや、真珠の飼育セットなど、「育てもの」が次々に登場している。

さらに、従来の芸術家のパトロンとは違って、一般の人が無名の音楽家やコメディアンを育てることに参加する動きが見られる。

四・六　「わたしが主役」現象

これら①～⑤の流行現象に共通した傾向は、「わたしが主役」というものである。それは、有名人でもなく、特別な才能を持つことを世間に認められた「アーチスト」でもない一般の人々のあいだで、〈自分がアーチストで、自分が主役で、自分たちが観客〉という形を取る現象である。

この「わたしが主役」現象をどう捉えればよいのだろうか。また、こうした現象は「アート」の行方にどう影響してくるのだろうか。

五　人間の行為をとらえる観点――「みたて」「したて」「やつし」

前記のような現象をさらに深く考察するために、切り口を一つ呈示して、それに従って解釈を試みたい。

人間の行為をとらえるときの一つの観点を提示したい。それは「みたて」「したて」「やつし」という三つ一組の概念である。

五・一　「みたて」

「みたて」には一般に、「医者が患者の容体を見立てる」とか「店員がお客さんのスーツに合ったネクタイを見立てる」という用法がある。これらは、「正しい状態や

適切な物などを見極める」という意味である。

その一方で、落語「長屋の花見」で「沢庵を玉子焼きに見立てる」ほか、俳句・庭作り・茶の湯での「見立て」がある。これは、「あるものをそれとは別のものにみなす」という意味である。ここでは主としてこの意味からヒントを得て「みたて」を定義する。

〔定義1〕「みたて」とは、あるものを別のものとみなす想像上の作業である(9)。

「みたて」の基本構造は、「ある物を別の物であるかのようにみなす」ことであるが、ある物を別の物に実際に作り変えたりはしない。すなわち想像上の作業に限る。無論、「みたて代」を「みたて先」に似せて作ることはあるが、「みたて先」に似せて作られたもの(=「みたて代」)を見て「みたて先」を思い浮かべる作業は「みたて」であっても、「みたて代」を「みたて先」に似せて作る作業自体は「みたて」ではない。

ここでは、「みたて代」と「みたて先」のギャップを想像力で埋めることが、「みたて」の本質であると考える。

五・二　「したて」

これに対して、「あるものを別のものに実際に変えてしまう」ことを「したて」といって、想像上の作業である「みたて」と区別する。

「したて」は、洋服を「仕立てる」とか下町娘を貴婦人に「仕立て上げる」といった日常の用法からヒントを得て、「あるものを別のものに実際に変えてしまう」という意味に定義する。

〔定義2〕「したて」とは、「自分以外の人や物が実際に変化した状態と、場合によっては変化する過程も含めての変化した状態に、接すること(10)。

このように「みたて」と「したて」を区別したときに、「朝鮮の李王朝での米を盛る器を茶の湯の茶碗にみたて、実際に茶の湯の茶碗として使う」というのは、実際に茶の湯の茶碗として使っているので、「したて」ということになる。この場合「したて元」が飯茶碗で「したて先」

が抹茶茶碗である。

五・三　「やつし」

折口信夫氏の説[11]によると、「やつし」という言葉は、もともとは祭りや寺の法会の際に参加者が身を清めることから始まった。精進潔斎することを「やつる」といい、強制されて「やつる」ことを「やつす」と言った[12]。

精進潔斎の禁欲生活によってげっそりと痩せ衰える。その痩せ衰え、すなわち「やつれ」を強調するための演出に、蓑笠をまとうこともした。

やがて蓑笠をまとうこと自体が「やつし」の意味に取って代わり、蓑笠が時代を下ると派手な衣裳や冠物に変化して行く。こうして衣裳による仮装を「やつし」というようになった。

仮装の「やつし」は、江戸時代には、「身分の高い人物や大金持ちが故あって卑賤で貧しい者の姿をとる」ことを意味するようになる。その代表的な例が歌舞伎の「やつし物」である[13]。さらに後には「やつす」は「おしゃれをする」という意味でも使われるようになった。化粧をしたり衣装を着たりする「おしゃれ」や「おめかし」の意味の「やつし」は、今日でも使われている[14]。以上の「やつし」の意味をまとめると、次のようになる。

ア　精進潔斎
イ　やつれの強調である扮装
ウ　仮の姿〔やつし物〕
エ　おしゃれ

これらに共通な要素は「やつす人自体の状態が変化する」ということである。そこでこの点に着目して、「やつし」を定義した。

> 〔定義3〕「やつし」とは、自分自身の身体的・空間的・社会的状態を、実際に変化させること[15][16]。

五・四　「みたて」「したて」「やつし」の関係

まず、「みたて」「したて」「やつし」は次の三つの観点によって区別される。

ア　「みたて」は想像上の作業だが、「したて」と「やつ

し」は現実の行為である。

イ　「したて」は必ずしも本人が行う必要はないが（多くの場合は他者が行う）、「みたて」と「やつし」は本人が行わなければ成立しない。

ウ　「やつし」は本人の状態が現実に変化するが、「したて」と「みたて」は本人の状態は現実には変化しない。

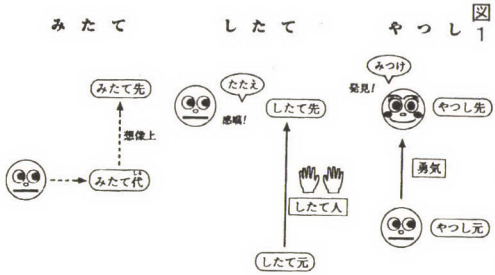
ここでア～ウの観点から「みたて」「したて」「やつし」をまとめて表にしたものも示しておく（表1）(17)。また、「みたて」「したて」「やつし」を図式化したものも記しておこう（図1）。

表1「みたて」「したて」「やつし」の関係

作業＼代	想像	現実
自　分	みたて	やつし
他　者	みたて	したて

※他者とは他人と物の総称

図1



六　「わたしが主役」の時代は「やつし」の時代

ここで、「みたて」「したて」「やつし」という観点を用いて「私が主役」の時代を見てみよう。

六・一　「やつし」の特徴

「みたて」と「したて」は本人の状態の現実的な変化がはなく、「やつし」は本人の状態が現実に変化するというものであった。これに対して「やつし」は、自分自身を「やつし代」にすることにより新しい体験としての「みつけ」(15)が得られるという構造になっている。「やつし」はやつす本人にとってのみ成立するという点が、ここでは重要である。

たとえば演劇を例にとると、観客にとって演劇は、俳優という他者の身体の状態が変化するのを見る「したて」である。そして作品に感動したときに観客は「たたえ」を得る。しかし一方、演じている俳優にとって、演劇は自分自身の身体的な状態を実際に変化させる「やつし」である。俳優にとっては「みつけ」を得る可能性もあ

る。しかし俳優の「みつけ」は当人にとっては直接的な体験であるが、それを他者と直接的に共有することはできない。他者との共有は言語などを介さなくては不可能である。

このように、「やつし」では「わが身をもってする」点が重要である。

六・二　「わたしが主役」の時代は「やつし」の時代

「わたしが主役」すなわち〈自分がアーチストで、自分が主役で、自分たちが観客〉という構造は、「アート」や文化的状況において、特別な才能を持つことが世間的に認められている「アーチスト」や有名人のしたてたものに一般の人々が接する「したて」中心の状態から、一般の人々が「やつし」を積極的にするようになり、しかも一般の人々の「やつし」がある程度評価されるようになっていることを示している。すなわち「したて」から「やつし」へと時代の変化を読み取ることができる。

六・三　美的基準の個人への内在化

また、「わが身をもってするやつし」を有意義にするためには、自分自身の価値観を持つことと自分が楽しむことが不可欠であるが、「やつし」を通して自分たちが楽しむという今日の流行現象から、このことに人々が気づいていることがわかる。

流行の歴史を見ると、美しさの基準は人間の個性に対して外在的で、流行に乗った状態になることや美しく見せるためには、かなり無理をしてそれに合わせなくてはならない場合が多かった。たとえばウエストのくびれた女性が美しいとされ、しかも細ければ細いほど評価が高い時代には、コルセットで縛り上げ、中には肋骨を抜いてまでして細くしたために、健康上さまざまな問題が生じた時代がある。纏足もこうした美的価値観に個人が合わせた典型的な例だ。現在では男女ともほっそりした体型が美的に好まれるので、やせるためのダイエットに励む人も多い。それが原因で貧血や骨粗鬆症になる人も少なくないが、心理的な圧力のために拒食症や過食症に陥る人もいる。「いき」はやせ我慢という[18]、流行に乗った状態でいるためには、あるいは一定水準以上に美しいと世間的に認められるた

めには、やせ我慢をしなければならないことが多いのが、過去も現在も変わらないところだ。

しかし現在の流行現象を見ると、若者のルーズソックス[19]のように流行に乗らないと仲間外れになるから仕方なく流行に従っているという意識がある一方で、高齢者の社交ダンスのように自分が楽しむことを最優先に行動した結果が流行になってしまったというものも、今日流行の「やつし」のなかに着実に増えてきている。こうした面に着目するならば、現在そして今後の「やつし」は、外見も重要だが、自分自身の身体を通して、自分がいかに楽しみ気持ちよくなるかが重視されるものなので、美的な基準は内在的なものに移行しつつあるということができる。

さらに、「やつし」の目的もまた、身体を通して自分自身の人生や経験、そして周囲との関係を創造して行くことに移行している。

七　これからの「アート」と哲学の課題

七・一　ボーダレス

「アート」で「作者」としての個人の重要性が増して、絵画・彫刻・建築などがそれぞれ独立して、「作品」という概念が成立したのは近代であった。すなわち、特別な才能と技術を持った芸術家がしたてた作品を不特定多数の鑑賞者に呈示する、という「したて」のパターンが近代に成立した。

これに対して「わたしが主役」すなわち「やつし」の時代は「したて人」と鑑賞者の一体化、あるいはアーチストとアマチュアのボーダレス化の時代である。だれもがアーチストと鑑賞者の立場を場合に応じて入れ替わる可能性が開かれた状況である。こうした社会では「アート」とそうでないものとの境界が曖昧になり、消滅する方向性を持っている。従って、西洋近代の「アート」だけが「アート」であるとする厳密な立場をとるならば、「アート」は終焉を迎えている。現在のわれわれは、従来の「芸術」あるいは「アート」の概念の変更をせまられているところに来ている。

七・二　「やつし」の重要性の増加

現在、マスメディア・マルチメディア・インターネットな

ど情報環境の発達により、大量の情報が我々の周りにあふれている。実際、インターネットやパソコン通信などの普及により、その場に行かなくても気軽に人と話しをし、買い物をし、絵画の鑑賞ができる。こうした社会は鑑賞者を大量に生産し、「みたて」や「したて」の機会を増加させはするが、それと同時に、裏返しの現象として「やつし」の 機会は減って行くと考えられる。こうしたことから、我々の意識が現実に生きている日常の世界(生活世界)に根ざさないものになってしまっても、そのことに気づきにくくなっているが、この傾向は今後ますます強くなると予想される。言い換えれば、我々が現実に生きている世界に根ざした意識を持つためには、敢えて意識的に「やつし」をしなければならない社会になったということもできる。

たとえば劇場に行って気晴らしをする人は「したて」によって気晴らしをしているが、それだけではない。劇場に行くときに服を着替えたり髪を整えたり化粧をしたり、乗物に乗ったり歩いたり、こうした行くまでのプロセスによって気分が高揚してくるが、こうしたプロセスも「やつし」ということができる。同じ観劇でも、家庭のビデオでの観劇ではこうした効果(「みつけ」)は得られない。

こうした経験から、我々は「実際に行ってみる」「実際にしてみる」「実際に会ってみる」といった「やつし」の重要性を実感し、「自分の身体」で「やつし」をして「みつけ」[15]を得て、心理的充足や癒し感、そして人とのつながりを得ることが、今後ますます求められるようになる。

七・三　学における「したて」から「やつし」への課題

近代において「したて」として「アート」が成立したことと並行して、美学や美術評論も成立した。そして、それらもまた「したて」の観点から行われてきた。

近代以降の「アート」では、作者が呈示するのは完成した「作品」であり、自分自身の生々しい姿で はない。仮にそれが呈示されることがあってもそれは「作品」として「したて」られた作者の姿である。また鑑賞者にしても、すでに完成された「作品」を鑑賞することを当然視して、鑑賞行為が作者の創作行為に積極的な影響を与えることは始めから想定されていない。作者も鑑賞者

もともに、創作活動として自分自身の生々しい姿を呈示し合う場に「やつし」てはおらず、互いに「したて」の作業をしてい るという形が中心的である。

無論、近代においても、演劇や即興演奏などに見られるように、「やつし」の芸術活動が行われなかったわけでも評価されなかったわけでもないが、メディアによって情報化されたり学問の対象とされる場合には、生の「やつし」の側面は挿話的な扱いを受けるに過ぎず、芸術の本質的な議論からは抜け落ちてきた。このように、近代の芸術においては「したて」が中心的な作業であったし、殊に、学として の議論は「したて」であった。

ところで、学問的な考察には対象化・抽象化が必要である。それにもかかわらず「やつし」としての学は可能だろうか。

学問とはそもそも、対象を客観化・抽象化したり、思考的シミュレーションや実験を行ったりする「したて」・「みたて」の作業である。

ルネッサンスや初期近代までの大思想家と言われる人々は、こうした方法を用いて新しく考える作業に「やつし」をすることはしていた。

しかし、現在の研究者は、殊に人文科学の分野では、過去の大思想家の「したて」の作業の結果であるテキストの解釈作業という、「したて」の「したて」(二重の「したて」)が研究作業のうちの大きな部分を占めているのが現状であろう。

そこで、学問にも「やつし」の観点を取り入れてみてもよいのではないだろうか。殊に、哲学や倫理学といった価値基準に根本的に関わる分野では、これまでに見てきたような社会状況からも、「やつし」の観点を取り入れることも重要であると考えられる。

七・四　サクセスフル　エイジング

六・三で見たように、美的基準が内在化することと、「わたし主役」ということから、現在そして今後の「アート」や日常生活においてプロ／アマチュアを問わず求める美的価値を考えると、これまでのように一元的な美を追求する方向から、多元的な美を追求する方向に変化することが予想される。「やつしのアート」の時代は多様な美的価値が共存する社会であり、従来あるいは現

在もきわめて強力な若さ(およびそれと相関性の高い外見的な造形美)を至上とする一元的価値観に対抗する形での「サクセス フルエイジング(20)的な美しさ」の発見・確立・承認そして歴史的・社会的・哲学的な裏付けが、われわれの課題として浮かび上がってくる。

ここに「アート」と哲学の新しい課題があることを最後に指摘したい。

註

(1)本論ではすべてラテン文字表記にした。

(2)アリストテレス『ニコマコス倫理学』高田三郎訳、岩波書店、一九七一年、第六巻参照。

(3)音楽ではたとえばシュトックハウゼンやシェフェール、ジョン・ケージ(典型的なものは「四分三三秒」)以降の世代の作品、絵画ではミロやジャクソン・ポロックのアクションペインティングの作品、また造形芸術ではヨーゼフ・ボイスに代表されるパフォーマンスという新たな分野、ダンスではマース・カニングハムの作品などが挙げられる。

(4)たとえば、京都では舞子に変装する事業はすでに確立したビジネスになり、業者も数多くある。映画撮影所や写真館でも、様々な時代の装束で写真撮影ができるところが増えている。また、商店街や祭りなどの地域振興イベントにも変身ビジネスが取り入れられるようになった。

さらに雑誌でもしばしば変身の仕方の特集が見られる。それは、従来の〈アスタイルやメーキャップを変えたりするような「イメージチェンジ」の域を超えて、部屋の模様替えや引っ越し、資格取得といったライフスタイルまでも視野に入れたものになっている。

(5)たとえば「Shall We ダンス?」(監督周防正行)、「KYOKO」(監督村上龍)、「書かれた顔」(監督ダニエル・シュミット)など。

(6)バレエの公演も多いが、とくに目を引くのはコンテンポラリーダンスである。たとえば現在の絵 画・彫刻・建築の状況と比較されたい。

(7)社交ダンスパーティーを入れたパック旅行や、ダンスホールがあることを売り物にするホテルも増加

中。

(8)旅行会社に行って体験ツアーのパンフレットを集めてみると、すぐに十種類は手に入る。また、「バリ舞踊体験旅行」や「冬の金沢体験紀行」といったような、観光に地方独特の伝統産業や伝統芸能を体験する(バリの舞踊は見にいくのではなくレッスンを受けて民族衣裳を着て成果を披露する)ことが売り物の旅行や地域振興策も見られる。さらに、体験旅行のガイドブックまで発売されている。

(9)この際「あるもの」を「みたて代(しろ)」、「別のもの」を「みたて先」ということにする。

たとえば自分がピアニストになって演奏しているろことを想像して、「この曲のここはこういう風なタッチでなくちゃ」と自分で弾いているところを思い描くのは「みたて」である。

(10)この際の変化する前のものを「したて元」、変化した後のものを「したて先」、変化させる人を「したて人(にん)」ということにする。また「したて先」に対して(すばらしい芸術作品を見たときなど)感嘆の念が生じた場合に、それを「たたえ」ということにする。

たとえばピアノのリサイタルに出掛けて行ってピアニストの演奏に耳を傾けているとき、それは「したて」である。

(11)折口信夫『折口信夫全集ノート篇第五巻三十六風流踊りと祇園囃子と』、中央公論社、昭和四六年。

(12)因みに「やつれる」という語は、現在は使われていない「やつる」という動詞の自発型(「自然にその状態になる」という意味の形)。たとえば「折る」の自発型は「折れる」になる。

これを参考にして「やつれる」の意味から「やつる」の意味を推測すると、「自分の意志でやつれた状態になる」ということになり、歴史的にもそのような意で使われてきた。すなわち、祭りや法会に参加するため、体がやせ細るまでの断食等の禁欲を行うことを「やつる」といった。

この「やつる」という動詞の使役型(強制的にそうさせるという意味の形、たとえば「帰る」の使役型は「帰す」)が「やつす」である。「やつす」は「共同体の

規範により強制的にやつれさせる」という意味だった。

(13)テレビ番組の時代劇「水戸黄門」もこの意味での「やつし物」の典型。

(14)関西言葉の圏内では現在でも使用されているのを見かける。

(15)この際の自分が変化する前の状態を「やつし元」、変化した後の状態を「やつし先」ということにする。また「やつし」の結果新たな発見があった場合に、それを「みつけ」ということにする。

たとえばピアノの発表会に出て自分が弾くのが「やつし」である。

(16)石田かおり『〔現象学的化粧論〕おしゃれの哲学』、理想社、一九九五年(一二一頁)では「やつし」の定義に「自分の意志で自分自身の身体的・空間的・社会的状態を変化させること」というように、「自分の意志で」という一言が入っている。これは、同書では「かっこよさ」の追求としての「やつし」を論じているためであって、本論では「かっこよさ」の追求に限定しない一般論としての「やつし」を論じていることとの相違に起因する。

(17)本文中の表は読みやすさを優先したので、かなり粗雑で不正確になっている。詳細で精密な表は以、石田かおり『〔現象学的化粧論〕おしゃれの哲学』、理想社、一九九五年、一三七頁を参照。

(18)九鬼周造『「いき」の構造』岩波書店、昭和五年。

(19)高校生から始まって今や全国の少女と子供(女性)のあいだに広まった靴下。多くは学生服を着用したときに使用する。白い無地で、普通の靴下では足にフィットするために編み込んであるゴムを外してある製品。そのために太くて履くとたるむ。そのたるませ具合で「かわいく」見せる工夫をする。

(20)筆者の所属する㈱資生堂の社会運動であり、目下の研究開発の最優先課題である。

(いしだ　かおり　資生堂ビューティーサイエンス研究所)